

## 源実朝の和歌活動

——定家所伝本金槐和歌集の表現したもの——

三木 麻子

キーワード：定家所伝本金槐和歌集 吾妻鏡 後鳥羽院

### はじめに

多くの人の心を捉える源実朝の人物像や和歌について、近年、和歌研究・歴史的研究の双方から検討が加えられ、成果を上げていく。その最新の成果は、渡部泰明編『源実朝 虚実を越えて』(勉誠出版・二〇一九年)である。また、仮に二〇〇〇年以降の研究書に限っても、

①今関敏子 『『金槐和歌集』の時空——定家所伝本の配列構成』

(和泉書院・二〇〇〇年)

②五味文彦 『増補吾妻鏡の方法——事実と神話に見る中世——』

(吉川弘文館・二〇〇〇年)

③五味文彦 『後鳥羽上皇 新古今集はなにを語るか』

(角川選書五〇六・角川学芸出版・二〇一二年)

④今関俊子 『実朝の歌 金槐和歌集訳注』(青簡舎・二〇一三年)

⑤坂井孝一 『源実朝 「東国の王権」を夢見た将軍』

(講談社選書メチエ五七八・講談社・二〇一四年)

⑥五味文彦 『源実朝 歌と身体からの歴史学』

(角川選書五六二・KADOKAWA・二〇一五年)

⑦吉野朋美 『後鳥羽院とその時代』(笠間書院・二〇一五年)

⑧今関敏子 『金槐和歌集論——定家所伝本と実朝——』

(青簡舎・二〇一六年)

⑨渡部泰明 『中世和歌史論 様式と方法』(岩波書店・二〇一七年)

⑩坂井孝一 『承久の乱』

(中公新書二五二七・中央公論新社・二〇一八年)

⑪坂井孝一 『源氏将軍断絶なぜ頼朝の血は三代で途絶えたか』

(PHP新書・PHP研究所・二〇二〇年)

⑫今関俊子 『平安鎌倉文学めぐり——虚構の真実・詩情のいのち』

(青簡舎・二〇二一年)

などに近年の成果がまとめられている。この成果を基に改めて『金槐和歌集』が映し出す実朝詠歌を考察してみたい。

### 一、実朝の作歌方法

「はじめに」にあげた中でも、⑨に「源実朝と音」(注一)、「源実朝と『万葉集』」(注二)の御論のある渡部泰明氏には、編著『源

実朝 虚実を越えて』に、「実朝像の由来」の御論がある。

「源実朝と音」では、六一九番歌(注3)について、

ここで、一つ乱暴な仮説を提出してみたい。建暦元年七月、関東に大雨は降らなかったのかもしれない。当該歌は詞書も含め、『貞観政要』を読んで(建暦元年(一一二一)七月から十一月)、帝王のなすべき道に目覚めた実朝が、これまで学んだ漢学の知識などを動員しながら、紙上で試みた止雨の修法であった、と。そう考えると、詞書中の「ひとり本尊に向かひて」の「ひとり」の語も、それが事実行われたものであるかと問われる事を、あらかじめ回避するための言い訳のようにも思えてくるのである。

右の仮説の是非はともかく、一首が、白楽天の祭文や漢学の知識、故実・作法の勉強を動員しながら、作り上げた文字通りの「作品」であることだけは確かだろう。実朝の儀式・儀礼への関心もうかがえるし、唱え言など具体的な「声」(「八大龍王雨やめたまへ」)を取り入れてしまう力業なども窺知されるのである。それではあまりに構成的で、実朝らしくない、というべきだろうか。むしろ我々は、音や声に触発されて想像力を拡げる一方、それを編み上げて自己の表現としてゆく、実朝の歌人としてのふところの深さに目を向けるべきなのではないだろうか。

( ) 内の注および傍線は稿者による

と述べ、実朝が詠歌のみならず、詞書の文言や歌集編纂まで視野に入れた緻密な作品創作を行っていることを印象づけた。

そして、「実朝像の由来」では、『新勅撰和歌集』入集歌と、その類似の歌を比較し、実朝歌が詠歌の過程で「言葉が相互に縁づけられて展開していく中で、結果的にその主体の身体的な存在感が抑制され、希薄になっていくように仕組まれている」とし、「言葉の相互関連を強め、主体の身体性を抑制する方向に向かう」とが、実朝の歌の磨き上げであると捉えている。そして後鳥羽院の詠を含む、例えば『仙洞句題五十首』などから言葉のつなぎ方を学んで「身体性に満ちた主体を……希薄化してゆく方法を育てていったのではないだろうか」とも述べている。

これは稿者がかつて拙稿(注4)のなかで「実朝が古歌の歌語を詠もうとして、一つの枠にはめて詠んでしまう語のあること」、「写実の詠でも、自らの感興を古歌詞に置き換えてしまうこと」、「指摘し、「一つの枠の暗さと、自らの心を自らの語では表現しない詠法は、実朝がいつも抱いている心の、醒めた内実を映し出している」(「方法論の考察のなかでみられた、実朝の「歌作り」に励む姿は、自分の心を直接に、また自分の語(ことば)では述べないという、作者の主体が要求した方法であったと思われるのである」と結論した点と繋がる点があると思われる。それは、渡部氏が実朝の伝記的事実や個性的な歌からだけでなく、それ以外の歌にも実朝像を追求されたように、実朝の詠歌から実朝の内実を捉えようとした点である。そのためには、氏の言われるところの、実朝が「意図して作り上げた歌の中に息づく主体」をさらに分析する必要に思い至るのである。

また、中川博夫氏「実朝を読み直す——藤原定家所伝本『金槐

## 二、後鳥羽院

『和歌集』抄は、「想像するに実朝は、京都に遜色ない環境で歌を学び得たのではないか。そして、京都から送られてくる歌書類を貪欲に吸収したのではないか」を前提にする。稿者は、実朝の万葉集から新古今時代までの和歌の撰取は、実朝が独学から始め、目にするのできた歌書類をいったんあまねく撰取した結果、そこから「新古今歌に捉えられた情景を核として、先行歌の選択を行った」、それは、独自の言語感覚によつたものと考察している(注5)。中川氏のご指摘は、和歌の表現を基にしていることは当然であるが、「実朝の志向する所は、『新古今集』自体ではなく、そこに至る『万葉』を包摂した平安朝の和歌世界を捉え返す後鳥羽院自身や新古今集歌人たちとその歌壇であり、それを生む治世にあったと思われる」と、作歌に臨む実朝の心情的な背景にも目を向ける。そして、「新古今時代とりわけ後鳥羽院治世下の歌壇の和歌への同化を志向する情念がうかび上がってくるのである」と結論されている。単なる為政者への憧憬ではなく、文治の君として創作する後鳥羽院を崇め同化を願ったというご指摘は、鎌倉幕府を主体的に統括していこうとする実朝像が丹念に明らかになってきた近年の成果を踏まえ、首肯されるものである。『万葉』を包摂した平安朝の和歌世界を捉え返す後鳥羽院」にも実朝自らの和歌の習得過程と重なるものがあつたと思われるのである。

『吾妻鏡』元久二年(二二〇五)、実朝十四歳の記事に、

・四月大〇十二日己亥。將軍家令詠十二首和歌給云々。

・九月大〇二日乙酉。内藤兵衛尉朝親自京都下着。持參新古今和歌集。

とあつて、初めて記録に載せられた実朝の詠歌体験から五ヶ月のちに手にした『新古今和歌集』の記述が見える。京より持参された、父頼朝の和歌が載せられる和歌集への耽溺は、表現としての和歌作品の魅力とともに、仮名序に記された、

やまとうたは、むかしあめつちひらけはじめて、人のしわざいまださだまらざりし時、葦原中国のことはとして、稲田姫素鵝のさよりぞつたはれりける、しかありしよりこのかた、そのみちさかりにおこり、そのながれいまにたゆることなくして、いろにふけり、こころをのぶるなかだちとし、世ををさめ、たみをやはらぐるみちとせり、

という治世の手段として伝統的に継承されてきた「勅撰和歌集」であることの魅力にも拠るだろう。また、「代々の帝もこれをすてたまはず」尊重した和歌を、歌集として完成させた後鳥羽院に対する崇拜が高まつたのも頷ける。

実在の人物としての後鳥羽院への思いが詠まれた和歌については、夙に今関敏子氏が①で、樋口芳麻呂氏の「巻頭・巻末の歌に見られる後鳥羽院に寄せる熱い思慕の情は、建暦三年本が、紛れもなく、実朝自身の手で編まれていることを感じさせるのである」

樹氏「『沙石集』の実朝伝説——鎌倉時代における源実朝像」が収められる。坂井氏は、「將軍親裁を推進して確固たる權威・権力を保ち、和歌や蹴鞠を通じて治天の君後鳥羽院と信賴關係を築いて朝幕協調を実現した將軍、それが実朝であった」と述べられる。五味文彦氏②を嚆矢として、同氏⑥や坂井氏のこれまでの著書⑤⑩、そして、近著⑪『源氏將軍断絶なぜ頼朝の血は三代で途絶えたか』でも繰り返して説かれているところである。

また、その前提として、五味文彦氏⑥では、將軍実朝を擁立していくために「実朝の教育」が政子の指示で行われたことが指摘される。源仲章を侍読とし、政治問答書である『貞觀政要』仮名文作成が依頼され、『孝經』で読書始が行われた。武芸としての弓に関わる行事、蹴鞠、また和歌も源光行に『蒙求和歌』を書かせて和歌教育をしたことが記される。文弱の印象を抱かせる実朝の嗜好としての和歌・蹴鞠が『吾妻鏡』に描かれるが、本来は全人教育として始まった手ほどきの中で、実朝の和歌の才能が開花したと見るべきであったことが理解される。

また、小林氏の論でも『沙石集』に描かれる「実朝伝説」は、『吾妻鏡』の「実朝伝説」からも窺えるものであり、深い信仰心をもつ為政者としての実朝を伝えることが指摘される。説話集や歴史書が描く実朝像は、時代や後の幕府・為政者の意図するものではあつたろうが、近年の研究によって、そのなかに実朝像の深部が確実に見えてきているものと考えられる。

#### 四、『吾妻鏡』の伝える実朝の和歌活動

元久二年（一二〇五）、十四歳の時に十二首和歌を詠んだと記され、九月に『新古今和歌集』を入手してから、定家所伝本に記された奥書の日時、「建曆三年十二月十八日」に、実朝の作歌活動は一つのピークを迎えている。その始発には、元久元年（一二〇四）一二月に鎌倉に到着した坊門信清の女である御台所からもたらされる京の和歌事情も反映したかもしれない。

『吾妻鏡』に記される和歌に関連する記事を抜き出すと以下のようになる。

〈元久三年（一二〇六） 建曆三年（一二一三）〉

元久三年（一二〇六）四月二十七日に建永に改元。 十五歳

I 二月大〇四日乙卯。大雪降。鶴丘宮祭如例。及晩、將軍家為

覽雪、御出名越山辺。於相州（義時）山庄、有和歌御会。相

模太郎（泰時）、重胤、朝親等候其座。

承元二年（一二〇八） 十七歳

A 五月大〇二十九日丁卯、陰。兵衛尉清綱（源朝臣）、昨日自京都下着、

今日參御所、是随分有識也。仍將軍家有御対面。清綱称相伝

物、令進古今和歌集一部。左金吾基俊令書之由申之。先達筆

跡也。已可謂末代重宝、殊有御感。

承元三年（一二〇九） 十八歳

B 1 七月大〇五日丙申。將軍家依御夢想、被奉二十首御詠歌於

住吉社。内藤右馬允知親（好士也）為御使。去建永元年御初学之

後御歌撰三十首、為合点、被遣定家朝臣也。

(注6) というご指摘を踏まえて、「実朝の京への志向、後鳥羽院への帰属意識」を指摘する。また「將軍としての自己規定は希薄であり」、「後鳥羽院の廷臣たる自己は、実朝自身にとつて安定したものであつたろう」とも述べている。帰属意識については、福留温子氏にも「院より先に実朝が金槐集の巻頭巻軸を通して……院に対する熱い臣従・鑽仰の思いを発信した」(注7)とのご指摘がある。

卷末三首に「太上天皇の御書下し預りし時の歌」と題した和歌を置き、後鳥羽院への忠誠を、

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも

(金槐和歌集・雑・六六三)

と強い言葉でしめくつた歌集には、第一節で見たように、渡部氏が、

建曆元年七月、洪水天に漫、土民愁歎せむことを思ひて、

一人本尊に向かひ奉り、聊祈念を致して曰く

時によりすぐれば民の嘆きなり八大龍王雨やめたまへ

(金槐和歌集・雑・六一九)

について、「帝王のなすべき道に目覚めた実朝」が、実際の天候に拘わらず「雨やめたまへ」と祈る將軍を演出したことを指摘している。ここからはやはり「將軍としての自己規定」の演出を強く見るべきであろう。將軍としての自負を覗かせた和歌は、他にも指摘できる。拙稿(注8)でも述べた卷末三首の前に置かれた、

述懐の歌

君が代になほ永らへて月清み秋のみ空の影を待たなむ

である。

秋の空の月の光のような院の恵みを待とうというのは、臣下として当然の発想であるが「君が代になほ永らへて」と自分もやはり長生きしてと祈るのは、東国に自らが統治者として存在することを歌つてるのではないか。卷末の三首、

太上天皇御書下預時歌

大君の勅をかしこみちちわくに心はわくとも人にははめやも

東の国に我が居れば朝日さす藐姑射の山の影となりにき

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも

(金槐和歌集・雑・六六一～六六三)

は、院に対する畏敬の念や忠誠をうたうものであるが、そのような私が君とともに永遠にながらえて君の恵みを待つ、という第一の臣であることをいうのである。

また、この統治者としての立場で詠んだ歌については、坂井孝一氏が⑤で、賀部卷末の「祝いの歌」三六九・三七〇番についても、考察されているところである。

### 三、描かれた実朝像

では、次に歴史的研究の中で明らかにされるた、自信に満ちた実朝像を確認しておきたい。

冒頭に挙げた『源実朝 虚実を越えて』では、菊池紳一氏「鎌倉殿実朝」、坂井孝一氏「建保年間の源実朝と鎌倉幕府」、小林直

B2八月大〇十三日甲戌。知親元朝字也。与美作真人朝親字自京都帰参。所被遣于京極中将定家朝臣之御歌。加合点返進。又献詠歌口卷一。是六義風体事。内々依被尋仰也。

承元四年(一一二〇) 十九歳

C五月小〇六日癸巳。將軍家渡御広元朝臣家、相州(義時)、武州(時房)等被参。及和歌以下御興宴云々。亭主三代集為贈物云々。

II九月大〇十三日丁酉。於幕府有和歌御会。遠江守(源親広)。大和前司(源光行)、内藤馬允(知親)等候座云々。

III十一月大〇二十一日乙巳。雪降、於幕府南面、有和歌御会。重胤、(和田)朝盛等祇候云々。

建曆二年(一一二二) 二十一歳

D九月小〇二日乙巳。晴。筑後前司頼時去夜自京都下向。……此便宜、定家朝臣進消息併和歌文書等。今日持参御所。

建曆三年(一一二三) 十二月六日に建保と改元。二十二歳

IV二月大〇一日壬申。於幕府有和歌御会。題梅花契万春・武州(時房)、修理亮(泰時)、伊賀次郎兵衛尉(光宗)。和田新兵衛尉(朝盛)等参入。女房相接、披講之後、有御連歌云々。

V三月大〇十九日、庚申。於御所有庚申和歌御会。

VI四月小〇十五日丙戌。…于時、將軍家对朗月於南面有和歌御会。女房数輩候其砌。朝盛参進、献秀逸之間、御感及再往

VII七月小〇七日丙午。晴。牛剋大地震、今日、於御所有和歌御会。相州(義時)、修理亮(泰時)、東平太(重胤)等。所候其座也。

VIII九月大〇二十二日戊午。將軍家令遣、遙火取沢辺給。是依覽草

花秋興也。武藏守(時房)、修理亮(泰時)、出雲守(長定)、三浦左衛門尉(義村)、結城左右衛門尉(朝光)、内藤右馬允(知親)等令供奉、皆携歌道之輩也。

E十一月大〇二十三日己丑。天晴、京極侍從定家 献相伝私本万

葉集一部於將軍家是以二條中将雅経。依被尋也。就之去七日、羽林請取之送進。今日到着之間、広元朝臣持参御所。御賞飡無他。

I~VIII・Cは、歌会の記録であり、VIIIに記されるように、「皆携歌道之輩也」と歌道を嗜む臣下たちと、草花の秋の風情を楽しむとあり、当然詠歌も行われたことが予想される。

他にも建曆元年(一一二一)の記事には、四月二十九日、未明に実朝が永福寺に出かけたという記事がある。北条泰時、範高、知親、行村、重胤、康俊が供奉したと記されるが、これは前日、郭公の初音を聞いた者がいたためという。また、同年十月十三日には鴨長明が下向し、実朝に拝謁したとあり、頼朝をしのんだ和歌が伝えられている。実朝が和歌的感興をそそられたであろう事跡の記録が残されている。

また、最初に手にした『新古今和歌集』以外にも、A~EはA『古今和歌集』、C三代集、D定家の消息と和歌文書、E『万葉集』などの和歌文書を入手したことを示し、B1では実朝詠の住吉社への奉納と、定家に三十首の和歌を撰歌して送り、B2でその添削と「詠歌口伝一卷」(『近代秀歌』)をも得たことがわかる。これは事実として、十四歳から二十二歳の時期に自撰歌集を編むことが出来る力を培う基盤を実朝が得ていたことを伝えている。

しかし、実朝はさておき、この時期は実朝をめぐる東国武士の間にまで和歌活動が深く浸透していたとは考えられない時代である。では、『金槐和歌集』に、その活動を見ることはできるのだろうか。

## 五、『金槐和歌集』の編纂

『金槐和歌集』の詞書は、例えば冒頭十首の例を挙げると、

(一)

「正月一日よめる」

(一)

「立春の心をよめる」

(二)

「故郷立春」

(三)

「春のはじめに雪の降るをよめる」

(四・五)

「春のはじめのうた」

(六・七)

「屏風のゑに、かすがの山にゆきふれる所をよめる」

(八)

「若菜つむところ」

(九)

「雪中若菜といふことを」

(十)

のように勅撰集然としたものである。その中で数は少ないものの、

(二)

「ささらぎの廿日あまりのほどにやありけむ、北向の縁にたちいでて、夕暮の空をながめて一人居るに、雁のなくを聞きてよめる」

(春・五七)

「雨いたくふれる夜、ひとりほととぎすを聞きてよめる」

(夏・一四三)

「庭の萩わづかに残れるを、月さしいでてのち見るに、散りにたるにや、花のみえざりしかば」

(秋・一八八)

のような、日常を切り取ったと読める詞書も存在する。しかし、第一節で引いた六一九番歌が、「紙上で試みた止雨の修法」であるなら、詞書もそれを支える創作であった可能性が大である。

稿者も(二)に詞書を引いた五七番歌「ながめつつ思ふも悲し帰る雁行くらむ方の夕暮れの空」について、実朝は自らの実感を投影しつつも、『新古今集』の「眺めつつ思ふもさびし久方の月の都の明け方の空」(秋上・三九二・藤原家隆)の言葉によって詠歌していることを、「実朝は、溢れるばかりの自らの心を、先行する歌の言葉にあえて閉じ込めようとするのである。先行する和歌の多くのたぎる思いをその言葉によって再生し、自らの心を重ねていく。自らの実感を、古典和歌の手法を利用して先行する言葉で語らせようとしたとき、実朝にとって和歌は表現手段として新しい意味を持ったのだと思われる。彼は、題詠歌でもこうした実詠歌でも、直接的に自分の言葉で語ろうとしない」と述べたことがある(注9)。そうすると、その詞書は事実を伝えるものとして読む必然はなく、そのように創作した実朝の意図を考える必要が出てくるのである。

これを前提として、実詠歌と思われる詞書を検討したい。従来の実朝の印象とは少し離れた、「人々」とともに詠む和歌である。『金槐和歌集』で「人々」と和歌を詠む例は九例見える。

梅の花、風にはほふといふことを、人々によませ侍しついでに

(春・一五)

ii 山家に見花といふことを、人々あまたつかうまつりしついでに (春・六八)

iii 秋の野におく白露は玉なれやといふことを、人々におほせてつかうまつらせし時よめる (秋・一七六)

iv 佐保山のは、そのもみち時雨にぬるといふことを、人々によませしついでによめる (秋・二六六)

v 九月尽の心を、人々におほせてつかうまつらせしついでによめる (秋・二七四)

vi 海辺の千鳥といふことを、人々あまたつかうまつりしついでに (冬・二九四～二九六)

vii 年を経て待つ恋といふことを、人々におほせてつかうまつらせしついでに (恋・四七〇)

viii 声うちそふる沖つ白波といふことを、人々あまたつかうまつりしついでに (雑・五六六)

ix 相州の土屋といふ所に、とし九十にあまれる朽法師あり、をのづからきたる、昔語りなどせしついでに、身のたちゐにたへずなんなりぬることを、泣く泣く申ていでぬ、時に「老」といふことを、人々におほせてつかうまつらせしついでによ

み侍る歌 (雑・五九五～五九九、「老」〈底本になし〉を補う) 集う人々が同じ景物や題で和歌を詠むという例は、実生活でもあったことは第四節に引いたとおりである。

『古今和歌集』では、凡河内躬恒の和歌は、次のように詞書が記されている。

a かむなりのつばに人人あつまりて秋の夜をしむ歌よみけるつ

いでによめる (古今・秋上・一九〇詞書)

また、帝や主人がさぶらう人々に詠歌を命じる場合もある。

b 朱雀院の帝、布引の滝御覧せむとて文月の七日の日おはしましてありける時に、さぶらう人人に歌よませたまひけるよめる 橋長盛 (古今・雑上・九二七詞書)

c 田村の御時に女房のさぶらひにて御屏風の糸御覧じけるに、滝落ちたりける所おもしろし、これを題にてうたよめとさぶらふ人におほせられければよめる 三条の町 (古今・雑上・九三〇詞書)

d 廉義公家にて人人にうたよませ侍りけるに、草むらのなかの夜の虫といふ題を 平兼盛 (拾遺集・賀・二九五詞書)

e 三条院御時、五月五日、昌蒲の根を郭公のかたにつくりて、梅の枝にすゑて人のたてまつりて侍りけるを、これを題にて歌つかうまつれとおほせられければ 三条院女藏人左近 (新古今集・雑上・一四八九詞書)

b～e のように、人々に和歌を詠ませるだけでなく、『金槐和歌集』の i～ix は、主である実朝自身も和歌を詠んでいるので、『古今集』の a に見られる「ついでに」を多用していることになる。

この先行歌集に見られた円居の世界は、『吾妻鏡』にも記録されるもので、実朝はその和歌活動を、自撰歌集の中にも君臣和楽の世界として描こうとしたのだと思われる。和歌によって国を治める助けとするという勅撰集の方針を具現していることを示したのである。『吾妻鏡』に見える人々の和歌が勅撰集は当然として、和歌記録に残る例も少ないので、実際にどの程度の人々が和歌に

親しみ、場の喜びとしたかは、不明であるが、『金槐和歌集』は、いわば虚実を超えて、その世界を描いているのである。

そして、iii・ivなどの古歌に歌われた情景を題にして作歌する人々は、初学の和歌に励もうとする武士の姿を映し出しているようにも見える。

ただ、その中で勅撰集の世界であるなら、描かれないような文の朽法師が「身のたちゐにたへずなんなりぬることを、泣く泣く申ていでぬ」というような作歌の契機を描くところに、実朝の独特の感性があると思われる。

我幾そ見し世のことを思いでつあくるほどなき夜の寢覚めに  
思いでて夜はすがらに音をぞなくありし昔の世々の古ごと

なかなかには老いはほれても忘れなでなどか昔をいと想ぶらむ  
道遠し腰はふたへにかがまれば杖に縋りてぞこまでも来る  
さりともと思ふものから日を経ては次第しだいに弱る悲しさ

（金槐和歌集・雑・五九五～五九九）

この歌群に対し、今関敏子氏は「まだ青年である実朝が老人になり代わって詠む歌は、ある意味では明るく観念的であると言えるかもしれない。遊び心も充分ある」と「はじめに」に掲示した研究書①で言う。深刻にならず、歌によって異なる境遇に沈潜する体験を試みた結果であるから、実朝独特の作歌方法を示す作品として残したのである。それも「人々におほせてつかうまつらせしついで」であるために成立したことを詞書に示しているのがある。

### おわりに——虚像と実像——

『吾妻鏡』の記す和歌関連の事項に、家臣と和歌を介在する記事は他にもある。建永元年（一二〇六）、実朝十六歳の記事には、

・十二月大二十三日己巳。晴。重胤參相州。蒙御気色事、愁

嘆難休之由申。相州被仰云。是非始終事哉。凡逢如此殃者、

宮仕之習也。但猷詠歌者、定快然歎云々。仍於当座染筆。被

令詠一首。相州感之。相伴參御所給。重胤者徘徊門外。于時

將軍家折節出御南面。相州被披置彼歌於御前。重胤愁緒之余

及述懷。事之体不便之由、被申之。將軍家御詠吟及兩三反、

即召御前、「片土冬氣」「枯野眺望」「鷹狩」「雪後朝」等事、

被尋仰。数剋之後、相州退出給。重胤奉送于庭上。合手依賢

慮預免許。忽散沈淪之恨。子葉孫枝。永可候門下之由申之云々。

お気に入りの近習東重胤の在国が長引き、実朝の不興を買った重胤に、義時が和歌を詠んで献上するよう促し、実朝と歌題

について語り合うことができたというエピソードや建暦二年

（一二二二）、実朝二十一歳の折には、

・二月大〇一日戊寅。未明、將軍家以和田新兵衛尉朝盛、為御使。

被送遣梅花一枝於塩谷兵衛尉朝業、此間仰云。不名調。たれ

にか見せんと許云て不聞御返事可帰參云々。朝盛不違御旨。

即走參。朝業追奉一首和歌。

うれしさも匂も袖に余りけり我為おれる梅の初花

と実朝から梅花を贈られた朝業の感激を記している。また、建暦三年（一二二三）二月二十六日には、囚人洪川兼盛が荏柄社に奉

納した十首の和歌に感じて罪を許したことがみえる。このような、実朝が和歌の功績によって臣下を評価・判断したことを記す『吾妻鏡』の實在の家臣とのやりとりの内容は、『金槐和歌集』には見えないものである。「人々」と記した実朝の心中にはその面影はあったとしてもである。

稿者はかつて、実朝に対するさまざまなゆれのある評価に対して、それらに左右されずに実朝の残した和歌を読むことで実朝の内実に迫りたいと述べた(注10)。実朝の和歌を読むなかで実朝の作歌方法や創造する和歌世界を明らかにしてきたものであるが、本稿で取り上げた近年の研究は、史実を元にして浮かび上がる実朝像を実証し、和歌研究によっても、さらに実朝の歌集全体にわたる緻密な創作意識と水準を示している。これを実朝の実像とすることに賛同したい。そして、その実朝像と『吾妻鏡』が描こうとした実朝は異なるものであると考えるので、『吾妻鏡』からでさるだけ事実のみを読み取ろうとしたのが、第四節の『吾妻鏡』の伝える実朝の和歌活動である。虚像ともいえる実朝像を伝えるその他の歌集や作品との対比からも、実朝が『金槐和歌集』に残したものの、創り出そうとした世界、逆に見えないように構成した実生活、それを歌集から紐解く作業はまだまだ深められると考えられる。

最後に、実朝の創作意識を奥書からも確かめておきたい。

『金槐和歌集』の謎のひとつに、巻末の奥書がある。奥書の次頁に記す「かまくらの右大臣家集」は明らかに京で加筆されたものであるが、「建暦三年十二月十八日」と記したのは実朝自身で

あるのか、定家であるのか。十二月六日に建保と改元された事實は歌集成立とあまりに近く、改元の事実に実朝は気づかなかったのかという憶測もある。例えば、樋口芳麻呂氏『金槐和歌集』解説(注11)には「改元の詔書は十二月十五日に鎌倉に到着して將軍御所に届けられているから、歌集の成立時期を示す「建暦三年十二月十八日」も当然「建保元年十二月十八日」と書かれてよいはずだが、なんらかの理由で改元に気づかず鎌倉で記されたものである」とある。定家が書写の段階で記したならば、元号を誤るはずがないからである。

そもそも、『吾妻鏡』には、建保二年(一一二四)以降も、仙洞秋十首歌合が献上されたり(建保二年八月二九日)、六月二日に行われた仙洞歌合一巻が直後に実朝に進められたり(建保三年七月六日)する記録があつて(注12)、実朝の和歌への関心や和歌活動は続いており、実際に定家所伝本にない歌が、後の編集である柳営重槐本(貞享版本)に伝えられている。それなのに、実朝が二十二歳で歌集編纂を意図したのはなぜだろうか。

建暦三年(一一二二)は、和歌会の記録の数も多く、建暦は実朝の氣力に満ちた時代である。しかし、一方で五月に鎌倉中を震撼させた和田合戦があり、戦火によって実朝の御所は焼け落ち、鎌倉が大きく揺れた。二日、三日の合戦で討たれた人の記録を『吾妻鏡』は、和田十三人、横山三十一人、土屋十人、山内二十人、渋谷八人、毛利十人、鎌倉の人々三十人、逸見三十七人、捕虜二十八人、味方の討たれた人五十人と氏名を挙げ、負傷者は千余人と記している。この年、実際にもたびたびの大地震があり、異

変の記事も見える。並行して『吾妻鏡』は和歌関連の事項も記しているが、年末一二月、実朝は写経を行い、供養のちに三浦に遣わした経は、海底に沈められたという記事でこの年が終えられる。

第四節で見た和歌会の記録ⅢⅣに登場する和田朝盛は、Ⅵでは、和歌会のことを記す前に「和田新兵衛尉朝盛者、為將軍家御寵愛」と書かれ、和歌会で秀歌を献じた後、反逆を企てている和田の一統である苦しみのため出家したと記される。この悲劇性を高めるような『吾妻鏡』の描写はさておき、和歌を介して通じ合う家臣であった和田朝盛の一族が減じたのである。

実朝にとって激動の一年の記憶は、家集編纂を急がせ、第五節で見たような世界をも創出させたのではないだろうか。そして、改元の事実を知りながらも、奥書に「建暦」という元号を記したのは、「建暦」を平穩の治世の日々とするためではなかったろうか。つまり、自身の和歌活動が充実した日々でありながら、同時に騒乱が起こった「建暦」を、勅撰集の編纂に準え、文治のシンボルとして歌集が編纂されるような穏やかな日々として記憶させるようにあえて書き残したと見るものである。和歌の弟子である実朝の意図を理解したからこそ、定家もその「建暦」の奥書をそのままに写したのであるかと考えられる。

今後はさらに、実朝の創出した世界を探る一方で、虚像がどのように作られたかにも迫っていきたい。

\*本稿では、実朝編纂の定家書伝本『金槐和歌集』を『金槐和歌集』と表記

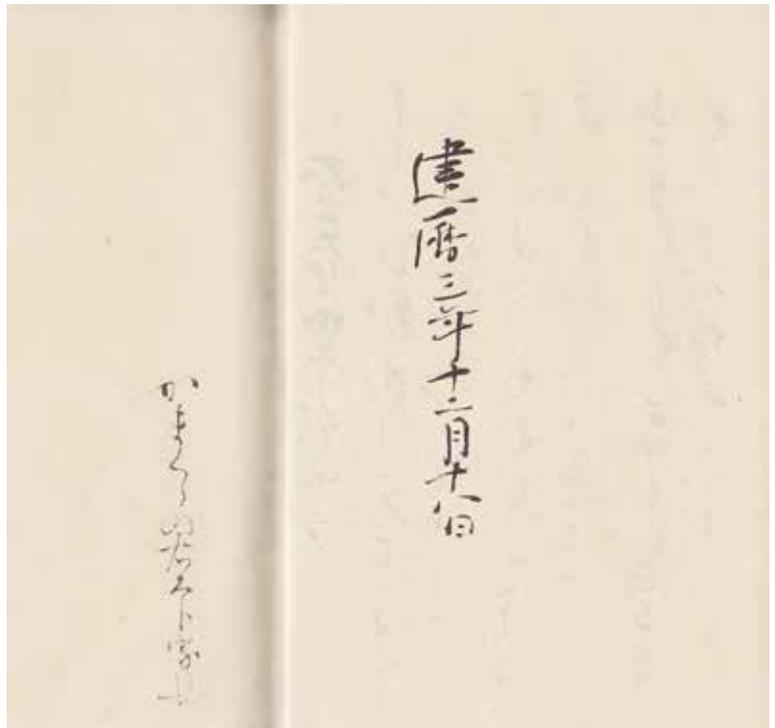
している。歌集の本文引用は『新編国歌大観』により、『金槐和歌集』は、『新編私家集大成 実朝Ⅰ』（底本定家所伝本複製（岩波書店））によって反復記号を文字に直すなど、それぞれに表記を改めた箇所がある。

\*本稿は、和歌文学会関西例会、第一一三回（二〇一三年二月七日・於大阪府立大学）における発表の一部を基にしたものである。

#### 【注】

- 1 初出「八代龍王雨やめたまへ——実朝の音」（『文学』二〇〇五年7・8月号）
- 2 初出「その後の万葉集 源実朝を例にして」（古橋信孝編『万葉集を読む』吉川弘文館、二〇〇八年）
- 3 第二節引用「時によりすぐれば民の嘆きなり八大龍王雨やめたまへ」
- 4 「実朝詠歌、方法と内実―歌枕表現を中心として―」（『女子大文学 国文篇』第33号、一九八二年三月）
- 5 注4および「実朝詠歌、一つの方法―結句を中心として―」（『女子大文学 国文篇』第30号・一九七九年三月）。
- 6 新潮古典集成『金槐和歌集』（一九八一年）解説。
- 7 福留温子氏「読む 金槐和歌集（定家所伝本）の巻頭巻軸部―後鳥羽院への思いを読む」（『日本文学』635・二〇〇六年五月）
- 8 『源実朝』（コレクシヨン日本歌人選051・笠間書院・二〇一二年）注8に同じ。
- 9 注8に同じ。
- 10 注8に同じ。
- 11 注6に同じ。
- 12 吉野朋美氏⑦の「実朝懐柔と和歌」に、建保三年（二二二五）『院四十五番歌合』は歌人・歌題の設定という企画段階から読者実朝を念頭に置い

たもので、「統治権者として積極的な政策を展開（五味文彦氏②による）」する時期に、朝廷との関わり強化によって將軍の地位・権力を保全しようとしていた美朝と後鳥羽院の実朝懐柔の思惑とが一致していたと説く。



（定家所伝本『金槐和歌集』奥書（複製）・昭和五年・岩波書店）